

教父研究会創立直後の風景

荒井 洋一

今から三五年ほど前の一九七七年に加藤信朗先生が今道友信先生や泉治典先生、それにK・リーゼンフーバー先生と共に創設された教父研究会に、私が一九七八年から参加し始めたとき、会場は目黒区八雲の東京都立大学であった。加藤武先生を初めとして、岡野昌雄先生や熊田陽一郎先生、宮内久光先生などが常連の出席者であった。

教父研究会には、東京都立大学の先生方のもとより、東京都立大学や東京大学、早稲田大学、慶応大学に上智大学の大学院生の方々までもがずらりと勢ぞろいして、まさに壮観であったことが思い出される。

学閥などとは無縁の、まさに開かれた研究の場がそこにあった。

開かれているばかりでなく、そこはまた同時に、きわめて高い水準の場でもあった。

東急東横線の都立大学の駅を降りて、歩いて会場に向かう際、会場は校舎の一階に位置していたにもかかわらず、近づいて行けば行くほどに、私の足は、まるではるかな高みに登る登山者でもあるかのように、しだいに重くなっていくのをおぼえたものである。

私の専門とするアウグスティヌス研究の関係上、右の先生方のうち、何人かの同じ専門の先生方について、次のような影像を回想することができる。

加藤信朗先生は、発表者から見て、いつも間近な席に坐られていたが、その姿は遠くの末席に坐る私から見ても、金剛山のように、確固不動にして、そびえて見えた。その発言には重みがあり、時には、雷鳴のように強く大きくとどろいて聞こえることもあったが、よく耳を澄ませてみると、その根底には、暖かい配慮が通奏低音のように響いていた。

また両加藤と称せられる加藤武先生の目は猛禽類のように鋭く、一字一句ゆるがせにはしないとの姿勢であった。まさに眼光紙背に徹するかのようであった。質疑応答の折に、アウグスティヌスによる聖書の引用方法に話題が及んだとき、ラ・ボナルディエール (La Bonnardière) による研究にもとづきつつ、「あたかも引用のオルケストラシオンですね」との珠玉の評言が加藤武先生により紹介された場面をあざやかに思い出すことができる。

目を閉じれば、昨年他界された泉治典先生が、やはり質疑応答の折に、まるで学殖の泉から水が自然に豊かにあふれてくるかのように、その蘊蓄の一端を皆に示してくださった場面も思い浮かんでく

る。私は、個人的にも、アウグステイヌスの『詩篇注解』の翻訳の仕事を進めるときに、「何ページか翻訳を見せてごらん」とおっしゃるので、お送りしたことがある。すると、しばらくして、原稿が真っ赤になるほど赤を入れられて返されたのを見て、恥ずかしく思うと共に、学恩の深さを痛感して今日に至っている。

岡野昌雄先生はいつもじつと静かに発表者の言葉に耳を傾けられていたが、ひとたび質問におよぶと、アウグステイヌス著作集の翻訳が正確で的確であることからもうかがわれるように、質疑応答を経て、当初、構想された学的な信念が揺らぐことはなく、用意周到であり、徹底的であった。

あれから三四年間、創立時から数えて三五年間、うまずたゆまず、教父研究会は毎年四回の研究会を重ねて今日に至っている。その間、世の中は、良い方向にか、または良くない方向にか、大いに変わったと思うが、教父研究会は、その根本精神において、変わることなく今日にまで至り、なんと、この原稿の執筆時において、第一四〇回を数えている。その第一四〇回に開催されたシンポジウムの提題者は、奇しくも、教父研究会を創設された加藤信朗先生であり、私はたまたま司会を務めることができた。

これはまさに驚異である。

かつて中世哲学会が聖心女子大学において開催された折、その懇親会のスピーチにおいて、加藤信朗先生は、変わっていく大学が多い中で聖心女子大学が変わらないことを讃えて「変わらないことには大変な努力や見識が必要」と述べられたことを思い起こす。それにちなむと、教父研究会もまた、疑いも

なく、諸先生方と若い研究者の方々のためまぬ努力と高い見識により、今日にまで至っていると見えよう。